

第60回

医療 と 哲学

悲嘆を分かち合うことが 困難になる時代 —グリーフケアと日本人(4)—

上智大学大学院実践宗教学研究科教授・
同グリーフケア研究所所長
島 蘭 進

悲しみをともにするという感覚

グリーフケアが求められる時代とは、悲嘆を分かち合うことの困難が強く実感される時代でもある。童謡が流行った時代(20世紀の中葉)は、漠然とした悲しみを表現した童謡が老若男女に歌われた時代だった。そこでは、喪失を嘆きつつ、遠方から故郷を思う望郷の歌が好まれた。童謡のなかには、悲嘆を分かち合うことへの希望の心情が表現されたものが多かったということである。だが、第二次世界大戦後はそうした喪失と望郷の歌をともに歌う機会も次第に減っていった。

ジェフリー・ゴラーは悲嘆の文化の後退の背景として、宗教的な儀礼と教義の衰退をみていた。それはそれで意義深い洞察である。日本でもこの経過をよく理解する必要がある。だが、悲嘆を分かち合うことの困難は宗教的な儀礼の後退という観点からだけでは十分に理解できない。童謡を例に考えようとしたのは、広く人々の共同性や共感のあり方がどのように変化してきたかをみるのも重要だということである。

このことを直感的によく捉えていた人物に、日

本の民俗学の創始者である柳田國男がいる。柳田國男が1941年に語った講演を基に、後に「涕泣史談」と題されたものがある(『定本柳田國男集』第7巻, 1968年)。この文章で柳田國男は、近年になって日本人はあまり泣かなくなったと書いている。悲しみを表現するのが下手になったというのだ。

こんな例が引かれている。「……二十歳の夏、友人と二人で、渥美半島の和地の大山へ登らうとして、麓の村の民家で草履をはきかへて居たら……婆さんが一人、近くよつて来て色々の事を尋ねる。何処の者だ、飯は食つたかだの、親は有るかだのと謂つて居るうちに、わしの孫もおまへさんのやうな息子であつた、東京へ行つて死んでしまつたといふかと思ふと、びつくりする様な声を揚げて、真正面で泣き出した。あの皺だらけの顔だけは、永遠に記憶から消え去らない」(『定本柳田國男集』第7巻, 334頁)。柳田は若い自分たちをみて亡くなった自分の息子のことを思い出して、若者たちに自らの深い悲嘆を隠しもしなかったこのお婆さんに強い敬意をもってこの文章を書いている。